

## 第 22 回胎児治療学会報告書

第 22 回日本胎児治療学会学術集会を、2026 年 3 月 6 日（金）～7 日（土）の 2 日間にわたり、大阪大学コンベンションセンターMO ホールにて開催いたしました。

日本胎児治療学会は設立から 21 年を迎え、この間、日本においても胎児診断の精度は大きく向上し、多様な胎児治療が実践されるようになりました。かつては限られた施設でのみ行われていた胎児医療も、現在では多くの患者さんにとって現実的な選択肢となりつつあります。一方で、診療体制の地域差や家族への支援体制、次世代の医療者育成など今後取り組むべき課題が残されており、こうした背景を踏まえ、本学術集会では「胎児医療を未来へ紡ぐ」をメインテーマとして開催いたしました。

本学術集会には計 **125 名** の参加があり、胎児診断および胎児治療に関する最新の知見や臨床経験が共有され、産科・小児科・小児外科をはじめとする多職種 of 医療者による活発な議論が行われました。

一般演題では、胎児不整脈、胎児貧血および胎児輸血、EXIT 手技、TTTS や胎児発育不全、胎児診断および治療など、例年通り多岐にわたるテーマについて発表が行われ、各施設の経験や新たな知見が共有されました。

シンポジウムでは「胎児治療で救えなかった症例から学ぶ」「小児外科の視点から見た胎児診断」をテーマに、産科医、小児科医、小児外科医が立場を越えて議論を行い、胎児診断から出生後治療までの連携の重要性が改めて確認されました。

また、特別講演では大阪大学大学院医学研究科 生殖遺伝学教室の**林克彦教授**より

「Build and see：再構築系による生殖系列の理解」と題したご講演をいただき、生命の起源を実験系で再構築するという、従来の常識を大きく塗り替えつつある最先端研究のお話を伺うことができました。

さらに、学会期間中には**懇親会を開催し 36 名が参加**し、世代や施設を越えた参加者同士の交流を深める貴重な機会となりました。また、学会終了後には公開講座「胎児医

療：妊娠 22 週の橋を渡るために必要なこと、渡れないときに必要なこと」を開催し、胎児医療を取り巻く課題について議論を深める機会となりました。

本学術集会の運営にあたっては、多くの関係者のご協力のもと円滑に実施することができました。関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

本学術集会が、今後の胎児医療のさらなる発展と診療科横断的な連携の深化につながる契機となることを祈念いたします。